

## もの言う牧師のエッセー 第351

## サッカーW杯小話

### ①「手のひら返し」

前監督が突然解任され、西野朗監督の下でのわずか3週間の合宿でサッカー・ワールドカップ（W杯）ロシア大会に臨んだ日本代表。前評判は今ひとつ、世の関心も盛り上がりぬまま迎えた初戦だが、いざフタを開ければコロンビアを撃破。W杯初のアジア勢の南米勢からの勝利という歴史的瞬間をリアルタイムで目撃し、一気に列島を燃え上がらせた。最終的に決勝トーナメントまで進み、1回戦で優勝候補のFIFAランク3位のベルギーをあと一歩のところまで追い詰めた。

ネット上では「西野さん、ごめんなさい」「感動をありがとう」「続投してほしい」などと、前評判を覆して16強に導いた西野監督に対し称賛や謝罪が溢れかえった。

いっぽう本田圭佑選手も、W杯開始前にはその言動やコロンビア戦でのボールロストなどで非難を浴びていたが、セネガル戦で日本人初の3大会連続ゴールとなる同点弾を決めると、日本中が沸き返り、ツイッターなどでは「本田さんごめんなさい」「謝らないと」「バカにしてごめんなさい」などと謝罪の大合唱となった。全く見事な手のひら返しである。

実は聖書には手のひら返しが多く登場する。古代のイスラエルは戦争ばかりしていたが、当然、弱い王が指揮を取り負けることもあれば、強い王によって勝つこともあり、その度に人々は一喜一憂を繰り返す。青年サウルは初代イスラエル王に就任したものの、誰も彼に期待せずむしろ軽蔑していたが、ヤベシュに攻めて来たアモン人に対し“初戦”で見事な勝利を飾った。人々はその時、

**「サウルなんか我々の王じゃない、などとほざいた連中は、どこでしょうか。」**

**引っぱり出してください。息の根を止めてやります。」1サムエル記11章12節：LB、**

などと言い出し見事に手のひらを返した。このいい加減さはイスラエル史の最後まで付きまとい彼らは滅亡したが、一方で最後まで筋を通す人々もいた。サウルに助けもらったヤベシュの人々である。後にサウルが討ち死にし、その死体が敵の城壁でさらされた時、彼らは決死隊を組んでサウルの死体を奪還、丁重に埋葬し、恩に報いたのであった。調子のいい時だけ教会に来る人や、困った時だけ神を信じ、すぐに手のひらを返し疎遠になる人が多い。だが覚えよう。十字架にかかって見事に死に勝利し、我々を救ってくれたイエスへの恩を忘れず、まっすぐ彼人について行くことこそが真の信仰者の道である。

2018-9-1

